

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

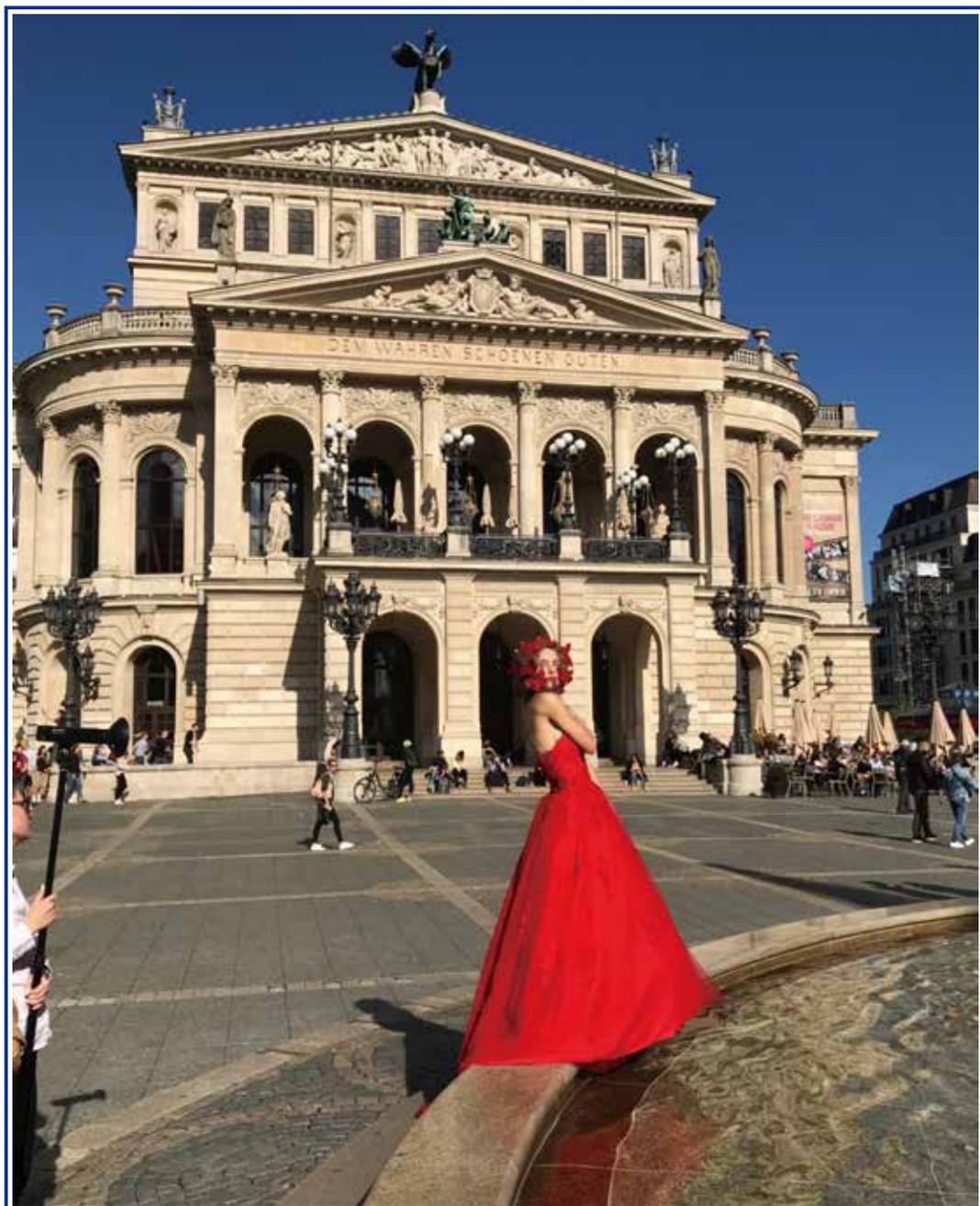
編集人 下平 泰生
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.43 No.6
2019.12.1
(通巻 258号)

日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
(禁転載)



目次

CONPT-TOUR2019 を振り返る	3
朝日新聞社 製作本部生産管理部次長 吉野 豪	5
(株)朝日プリンテック 製作部統括リーダー 清水 俊行	5
共同通信社 経営企画室委員 黒澤 勇	6
(株)高速オフセット 常務取締役管理本部長・総務部長 氷置 恒夫	8
(株)静岡新聞総合印刷 印刷部副部長 原木 伸也	9
中日新聞社 名古屋本社技術局局長 畔柳 佳正	9
(写真)ワルシャワからウィーン、グラーツへ	11
東日印刷(株) 常務取締役総務局長 西川 光昭	12
(株)トッパンメディアプリンテック関西 技術課課長 中野 聖士	12
(株)日経首都圏印刷 製作部部長 刑部 勇	13
西研グラフィックス(株) 国内営業本部東京支社 米田 直史	14
第一工業(株) 大阪支店搬送システム部部長 若生 直人	15
田中電気(株) 開発営業事業部課長 桐生 賢一	16
(株)東京機械製作所 常務執行役員営業副統括 神崎 幸雄	17
ニッカ(株) 営業本部新聞機器営業部部長 菅原 清弘	18
(写真)ベルリンからフランクフルトへ	19
日本アグファ・ゲバルト(株) 執行役員グラフィックシステム事業部新聞営業本部長 佐藤 克英	20
日本新聞インキ(株) 大阪支店営業部副部長 小松 一宏	21
富士通(株) 社会システム営業本部メディア営業統括部第一営業部アシスタントマネージャー 田中 裕哉	22
富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(株) 新聞営業部販売一課課長 清水 教弘	23
方正(株) メディア事業部 木村 俊介	24
(写真)視察&研修会	25
第125回技術懇談会 神戸新聞社播磨製作センターを見学	26
第72回新聞大会	26
会員消息、CONPT 日誌ほか	27
TOUR 帰国報告会	28

●表紙写真提供：CONPT-TOUR2019 入選作より ニッカ(株) 菅原 清弘氏 「旧オペラ座（フランクフルト）」

●表紙製版：(株)デイリースポーツ

●組版・印刷：(株)デイリースポーツ

CONPT-TOUR2019を振り返る

視察は順調 台風19号で帰国足止め

今年のCONPT-TOUR2019（第44回欧州新聞事情視察団）は10月3日に出発、欧州3カ国を訪問し新聞社、IFRA・DCX展の視察は順調に終えた。しかし、首都圏直撃の進路をとる台風19号のため羽田空港が閉鎖され帰国便は欠航、一行29人はフランクフルトで足止めの事態となった。

12日には全員そろって羽田に帰国する予定であったが、結局4人が13日～15日にそれぞれ別便でフランクフルト空港を出発。残る25人はドーハ、ホーチミンを経由する15日夕刻の便に搭乗、17日早朝に羽田に到着した。



【欧州3カ国で視察】 まずCONPT-TOUR初のポーランドへ。訪問先は首都ワルシャワの代表的メディアAGORA社で、旗艦紙はGazeta Wyborcza（ガゼタ・ヴィボルチャ：日本語訳「選挙新聞」）。1989年、ポーランド初の自由選挙を機に発足した会社と新聞は今年30周年を迎えた。

4日午後1時前に到着。早速会議室に入って、部門別にレクチャー。Gazeta Wyborczaの編集、オンライン戦略やマーケティング戦略、主力の雑誌編集、新聞にインサートする女性誌とそれぞれ担当の方から話を聞き、最後に同社のビジネス戦略。

AGORAは新聞、雑誌、広告、映画、ラジオなどの事業を手がけるが、売り上げ比率は映画関係が50%、新聞30%、その他20%だという。「Gazeta Wyborczaはナンバー1の新聞である」と強調。一方、フリーペーパーMetroは広告収入が減ったため、すでに休止したとのこと。レクチャーの後に編集、デジタル部門など社内を巡回、最後に正面玄関で記念撮影となった。

<CONPT-TOUR2019日程>

10月	視察先等	宿泊地
3木	出発(羽田)	ワルシャワ
4金	AGORA	〃
5土		〃
6日		ウィーン
7月	Styria Media Group	〃
8火	Märkische Allgemeine	ベルリン
9水	WPE・DCX視察	〃
10木	現地研修会	〃
11金	フランクフルトへ移動	
12土	*当初の帰国予定日	
13～15	フランクフルトから順次帰国便	
17木	中東・ベトナム経由の帰国便、羽田着	

ワルシャワからオーストリア・ウィーンへ。7日朝、ウィーンからバスで2時間30分ほど、オーストリア第2の都市グラーツに拠点を置くStyria Media Group（ステイリアメディアグループ）を訪問した。

まず社業の紹介とそのビデオ。1869年に印刷業から出発、今年は150周年だ。国内で新聞、雑誌、ウェブサイト、ラジオ、テレビなどの事業を展開、近隣のクロアチア、スロベニアなどでも事業を拡大している。

旗艦紙Kleine Zeitung（クライネ・ツァイトゥンク）はオーストリアで最大という日刊の地方紙。「小さな新聞」という意味だが、フォーマットは確かに小さい。少ない人数で始めた小さな新聞社だから、との紹介があった。ヨーロッパのベストデザインの新聞として、多くの部門で表彰されている。オンラインの時代となって紙の新聞は減少。デジタル体制を強化して、この5年でマルチメディア企業に成長したという。

本社から5kmほど離れて印刷工場がある。昨年秋に最新設備が稼働した。Manroland

Gossの輪転機、後工程はFerag。自動版交換装置や巻き取り運搬ロボットを備える。地方版が多く、版替え所要時間は4分だという。設備を新しくした理由は、「あと15年は(紙の印刷を)やるだろう。他からの委託もあるかも」とのこと。



「日本から見学者」の記事を掲載した10月9日付のMAZ紙。IFRA展を視察していた一行に届けてくれた

ドイツ・ベルリンには8日午前に着。バスでブランデンブルク州の州都ポツダムへ移動、日刊の地方紙Märkische Allgemeine Zeitung (メルキッシュ・アルゲマイネ・ツァイトゥンク:MAZ)紙を訪問した。

MAZは1946年に発刊。Märkische Verlags- und Druck-Gesellschaft (MVD)社が発行、この20年ほどで大幅に部数を減らし現在は10万部弱(19年1月)。2012年に多くの新聞社を傘下に持つMadsack (マドサック)メディアグループに入った。このため、紙面作りはMadsackの本拠地ハノーバーでコントロールされ、政治面など各紙共通の紙面は受信し、ここでは地方版などを作っている。デジタル部門では、初めの1時間は無料、それ以降を有料とする課金制だという。

MAZは隣接している工場(Pressdruck Potsdam)で印刷。KBAの輪転機、Müller-Martiniのインサートシステムなどを備える。MAZの判型はライニッシュ (350×520mm)。と呼ばれるものだが、これだけではなく、ノルディッシュ判(400×570mm)などにも対応し

て、全国紙のFrankfurter Allgemeineなどを受託印刷している。

IFRA World Publishing ExpoとDCX Digital Content Expoの併催は3年目を迎えた。昨年は3日間の開催だったが、今回は8、9日の2日間、会場の広さはほぼ半分になっていた。

ツアーでは9日に視察。WAN-IFRAのM・ワーフェル氏、D・ローパー氏による「世界の新聞最新事情」などを2つのセミナーを午前中に受講。昼食の後、注目されるブースとしてppi Media、Toyo Ink、Fujifilm、Manroland Goss、Agfa、K&B、Kodakの7社を巡回。引き続き各自それぞれが注目したブースを訪問した。

今回は1年空けた2021年の10月13、14日に「Arena Berlin」で開催の予定。

【フランクフルトに足止め】 日本では台風19号が首都圏に接近していた。視察を順調に終え、夕刻には研修会でツアーの仕上げという10日になって、羽田空港、成田空港閉鎖の報。結局、当初予定の帰国便は飛ばないことになった。

これ以降、JTB添乗員、林コーディネーターがルフトハンザと帰国便確保の交渉にあたった。一行はベルリンから新幹線でフランクフルトに移動、空港に近いホテルに落ち着き、飛行機の手配を待った。

帰国便は13、14、15日に4人がそれぞれ別便を確保。残る25人は15日夕、フランクフルトからドーハ、ホーチミン経由の帰国となり、羽田到着は17日早朝となった。

◇

帰国が足止めになって以降、帰国便の確保にあたっては、「どうしても動かさない予定のある方の帰国を優先する」などの方針をたて、一行の皆様の了解をいただきました。このご理解とご協力により全員無事に帰国できたものと、感謝申し上げます。(事務局)

貴重な時間を共有

朝日新聞社 製作本部生産管理部次長

吉野 豪

パスポートが切れて何年たつのだろう。COPNT-TOURへの参加が決まり、慌(あわ)ててパスポートを申請した。参加を告げられた時にまず思ったことは、忙しい時期に面倒だなど。

出発日が近づき、慌てて準備。バタバタのまま当日を迎え、久しぶりの海外に緊張しつつ集合場所へ。顔と名前は知っているけれども、知り合いといえる人がほとんどおらず、仕事と割り切りつつ出発。

ポーランドに始まり、オーストリア、ドイツの3カ国と訪問する中、視察メンバーとも、日を追うごとに親しくなっていく。考えると、10日以上もの間、朝から夜まで同じ人と一緒に居る機会は家族以外にはこれまでになく、これだけ一緒にいれば、良い意味で嫌でも親しくなるでしょう。

各国での視察先は、どれも歴史あるメディア企業であり、その国の歴史と文化に深く関係しており、学ぶべきことは多かった。また、視察メンバーとの時間は非常に楽しい時間となった。

*

視察の終わりを感ずる頃、日本に巨大な台風が接近している情報が入った。当初はギリギリ帰国できると思っていたが、ままと帰国日に直撃した。その時ですら、帰国が1日遅れてしまう程度にしか考えていなかった。

欠航が決まってから、予定外の電車での移動を経験し、帰国日の目途が立たない状況の中、フランクフルト空港近辺のホテルで代替便を待つことになった。

職場への罪悪感を抱きつつも、過ごしやすい秋の気候の中、ホテルのテラスで視察団メンバーと談話し、毎日、ホテル周辺をランニングして、近辺の街ケルスターバハを散策し

た=写真。

特に観光がないこの街に住んでいる気になってきたのは自分の調子の良さからだろうか。



延泊の時間がなければ、この街を知ることもしなかったし、何よりも、視察団のメンバーとさらなる時間を共有できたことは貴重だった。

難点は、会社や家族への迷惑をかけたこと、半袖で良いフランクフルトで過ごし、コートが必要としたポーランドを遠く昔のころのようにしか思えなくなったことだろう。

視察は本当に良い経験となった。何らかの形で仕事にも生かしたい。

視察団の皆さまには本当に感謝です。

長いようで、長かった15日間

(株)朝日プリンテック 製作部統括リーダー

清水 俊行

いつもと変わらない日々を過ごしているさなか、工場長に呼ばれた。このシチュエーションはなにかを頼まれることが多く胸騒ぎがした。予感は的中し、「今年のCONPT-TOURに清水君を推薦したのでよろしく」と言われ、責任の重大さと海外渡航への不安で頭の中がパニックになった。

海外へは、20年以上前に会社の仲間と行ったきりで、ましてや10日間もの長期旅行をし

たことがなく、何をどれだけ持って行けば良いのかわからず準備まで慌ただしかった。

そしていよいよ出発の日を迎え、羽田空港から約12時間のフライト。飛行機の中では酒を飲んで寝ていようと思ったが、フライトへの緊張と映画を見過ぎた(4作品)おかげ?で、あっという間にドイツ・ミュンヘンに到着した。そこから飛行機を乗り継ぎポーランド・ワルシャワについたのは夜9時頃だった。

今回訪問した国はポーランド、オーストリア、ドイツと、どの国も歴史を感じる建物が沢山あり、路面電車が行き交う素敵な街並みを満喫することが出来た。また季節的には肌寒さを感じるころのはずが、思ったほど寒くもなく快適に過ごすことが出来ました。



ベルリンの壁跡

視察に関しては、3か所の新聞社と2か所の印刷工場、IFRAの展示会にも行き、各社紙

媒体の部数が減ってきている中でデジタルファーストという考え方になってきて、売り上げの方は現在も紙媒体が大半を占めている状況。日本も同様に印刷部数の減少が止まりません。これから先、紙媒体をどのように維持していくのか、デジタルをどのように活用していくのか、会社全体でしっかり取り組んでいかなければならないと感じた。

*

ツアーも終盤を迎え何事もなく順調に行程を消化している最中、不穏なニュースが舞い込んできた。大型の台風19号(ハギビス)が日本に迫っていて、帰国日に関東直撃ではありませんか!。不安は見事に的中し、帰国便が欠航し帰れなくなってしまった。帰国は5日も遅れ、尚かつドーハ、ホーチミンを経由し30時間もかけての帰国となり、心身ともに疲れ果ててしまった。

最後の最後で台風19号に翻弄され15日間の長いツアーとなったが、事務局並びにJTBの方々が必死に帰国便の手配をしてくれたおかげで、全員無事に帰国することができ、この場を借りてお礼申し上げます。

最後にツアーに参加された皆様に感謝するとともに、益々のご活躍を祈っています。

最後に落とし穴が...

共同通信社 経営企画室委員

黒澤 勇

今回のツアーは当初8泊10日のスケジュールだった。いつもであれば、無理のないスケジュールだったが、今回は台風19号で思わぬ落とし穴にあった。ご存知の通り、台風19号は関東、信越、東北に甚大の被害を出した。その影響は我々のツアーにも波及した。10月10日の段階で帰国予定だったルフトハンザ航空の便が欠航になったのだ。通常であれば振替便も含め1日から2日もあれば対処できる



ベルリンの天気コーナーでも台風19号が取りあげられていた

が、今回は違った。それだけ台風19号の影響が計り知れなかったのだ。出発した10月3日

にはツアーメンバーの誰も予想しなかっただろう。羽田空港からドイツ・ミュンヘンを経由してポーランド・ワルシャワから始まり、オーストリア・ウィーン、そしてグラーツと順調にスケジュールを消化し、最終目的地ドイツ・ベルリンに到着した際に、ツアーメンバーから「台風19号ちょっとやばくないですか？」と声が出始めた。

*

そのような時、事務局とJTBはインターネットから情報を集め、日本との連絡を密にして、ありとあらゆる対策を検討していたことに頭が下がる。我々はツアー全員で、無事日本に帰国するまでがこのツアーの目的だ。誰一人欠けることなくそれを第8日まで消化していた矢先だった。情報が錯綜する中、毎日事務局とJTBはフランクフルトのルフトハンザ航空窓口と交渉し、いかに安全に早く帰国することができるかを目標に対応してきてくれたことに感謝する。



AGORAの会議室に提示された紙面

さて、ツアー全体の感想だが、ポーランドは、中国企業、韓国企業が街なかで目立った。特にレンタルサイクル、電動キックボードなどが大量に出回っていました。またカフェ、レストランには無料Wi-Fiスポットもあり、スマートフォンの普及も急速に伸びている国と感じました。そんな環境の中で訪問したメディアAGORAは、印刷よりデジタルビジネス、広告ビジネスなど幅広い話が聞けたが新

聞という印刷する部分に関しては今後どんどん縮小していく話を聞き、少々残念に思った次第だ。

このメディアの大きな収益源は映画の配給ビジネスで会社の大幅な売り上げをあげていた。今後のメディアの複合化されるビジネス形態を垣間みた感じがした。

続いて訪問した地はオーストリア第二の都市グラーツにあるStyriaだ。本社全体も洗練されており、印刷工場も増強し、紙を守りながら新しいビジネスに積極的に取り組んでいる姿が垣間見れた。デジタルに関しては読者を知るという表現が正しいのかわからないがマーケティングと分析(アナリスティック)に力を入れており、オーストリア以外にも積極的情報を発信していた。

*

最後に訪問したのはドイツ・ポツダムにあるMärkische Allgemeine Zeitung (MAZ)だ。新聞サイズに特徴があり、ドイツ国内で定期購読率93%を実現している。デジタルにも積極的に打って出ており、印刷機材もいろいろな印刷ビジネスに耐えるべく改良を加えていた。また印刷においても受託印刷ビジネスを強化しており、あわよくばドイツ国半分くらいのメディアの印刷を受けても大丈夫という自信が見受けられた。ここでツアーメンバーから「やはり印刷の匂いはいい」というコメントがあり、全員が印刷工場をくまなく調査したのは、このツアー全体でも一番の活動範囲だったと思う。これにより、ツアーの毎日に実施されていた情報交換及び現地研修会でより良いディスカッションができたのは言うまでもない。

最後にWAN-IFRA主催のWPE&DCX展を今年最後になるワーフェル氏のセッションと説明ツアーで締めくくった。

*

今回も多くの学ぶ点があり、このツアーの醍醐味である他の企業の方と意見交換などを

踏まえ、有意義な時間を過ごせたことは後に私の力になると思っている。

今回のツアーは、最後に帰国難民というめったに遭遇できない事態になった。しかし、それも事務局、JTBの誠心誠意の対応で解決でき、ツアー全員が無事帰国できたのは強い団結力があつたためだろうと思う。帰国してみれば良い思い出だ。

ツアー参加の皆さん、事務局、JTB添乗員の方々、本当にありがとうございました。

紙とデジタルそしてクラシック

株高速オフセット

常務取締役管理本部長・総務部長

氷置 恒夫

視察を通じて、テーマは「紙とデジタル」だったように思う。

1989年、かの「連帯」のワレサヤ映画監督のA・ワイダらが関わって発刊されたワルシャワのGazeta Wyborcza紙も、当時の50万部から10万部に部数が落込み、WEBサイトの「デジタル課金」に傾斜していた。印刷工場は2カ所を閉鎖して、ワルシャワ郊外の1カ所だけ。「紙の新聞は無くてもいいと考えているか？」との問いに「それはハードな質問だな。しかし、無くすつもりはない。なぜなら、我々はコンテンツビジネスで生きていくのだから」。もっとも、グループの収益の半分が映画(48の映画館を持っている)というのは、「戦場のピアニスト」のワルシャワらしく、うらやましくもあった。

オーストリア・グラーツのStyriaメディアグループのKleine Zeitung紙も10年間で70%の読者減で、デジタルファーストにシフト。2016年にオーストリアの日刊紙で初めて課金制を導入した。「紙を考えてストーリーをつくっていたが、(スタッフの)頭をデジタルに変えさせた」「このやり方が正しいかは分からないが、信じて進んでいる」と社長兼編集

長。それでも昨年、3000万ユーロをかけて工場設備を一新した。工場のボスに「紙の新聞が下降線なのに、どうして投資したのか？」と問うと「あと15年は(紙は)消えないよ」とあっさりしたものだった。

ドイツ・ポツダムのMAZ社も、2012年からデジタルを有料にした。よく読まれる地域ニュースを隠して中に入れたほか、1時間は無料だが、それを超えると課金としているそう。原稿はまずデジタル部門に入り、写真や見出しを変えながら紙の新聞を編集する。どのような記事がどんな人に読まれているかは、他の新聞同様、Googleアナリスティックで常に監視。編集室の柱に「13万人が28万ページを読んだ。我々は達成したぞ!」との紙が貼られていた。

*

印刷のことは分からないので、動画を多く撮影し持ち帰った。素人なりに感じたのは、工場は陽光が差し込み、日本の工場より開放感がある。音の大きい輪転場とコントロールルームの仕切りが分厚いガラス戸になっていること一つをとっても、さすがに労働者ファーストの伝統かなあ。



和食カー？ウィーンを走る

私にとって初めてのヨーロッパ。しかも、クラシック音楽ファンなので、ポーランド→オーストリア→ドイツというのは、たまらなかった。愛煙家なので気にしていたが、ブランデンブルク門前の石畳にさえ、吸い殻が多く落ちていた。「ベルリンは足元が灰皿」とガ

イドの男性。それがうらやましいとは全く思わないが、日本は何でもやり出すと極端すぎるのでは、と感じたことだった。

お世話になった同行の皆様は心より感謝したい。最後の最後に、台風19号で「帰国難民」になるというトラブルがあったが、みんな心身ともに、驚くほどタフだった！

貴重な経験

(株)静岡新聞総合印刷
印刷部副部長

原木 伸也

今回のCONPT-TOUR2019は、ポーランド、オーストリア、ドイツ3か国の新聞事情について、各国の新聞社とその印刷工場、ベルリンでWPE・DCXを視察しました。近年、欧州では紙媒体が厳しく、デジタルに向かっていくとの事前情報を基に視察に入りました。結果、各国共通して言えることは、紙媒体の新聞事情は厳しく、部数減少の傾向にあり、デジタルに注力していました。



ポツダムの新聞印刷工場で見
た
刷版自動交換装置

今回のTOURで初めて訪れたポーランドのAGORA社でも、部数減少に歯止めが利かない状況で、デジタルにシフトしていました。そのような状況の中、同社は紙の新聞紙面のレイアウトを刷新し、記事毎にセクションを分けるなど、読者に対するアピールに取り組んでいました(週末には雑誌も折り込む)。何

か対策をしなければ、現状は変えられないのだと再認識しました。

最も印象的だったのは、ドイツのポツダムにあるメルキッシュ出版印刷会社の印刷工場視察で、KBAの輪転機に刷版の自動交換装置が装備されていました。その名の通り、作業者は刷版を装置のハンガーに掛けるだけで、後は全自動で刷版の交換が完了します。ハンガーまで刷版搬送が自動化されれば、近い将来輪転機室の無人化も夢ではないと感じました。

*

今回のCONPT-TOURは私の人生の中で、初めての海外経験となりました。7月中旬にTOUR参加のお話をいただいた時は、期待が半分、責任の重さと初海外も重なり不安が半分以上と足しても10にならない複雑な気持ちでありました。その様な不安な気持ちを前向きに変えられたのは、ご多忙にもかかわらず、社に訪問して下さった参加者の方々や、職場の方々からの温かい言葉でした。心から御礼申し上げます。また、TOUR中に行動を共にしていただいた参加者の皆様にも心から御礼申し上げます。

最後に、訪れた国々の美しい景色、日本に上陸した台風19号の影響で帰国が5日遅れたこと、ドイツのタクシーのスピード(時速190km以上)など全てが貴重な経験となりました。参加された皆様、事務局の方々JTBの方々誠にありがとうございました。

我が意を得たり

中日新聞社
名古屋本社技術局局長

畔柳 佳正

ニューヨークタイムズ社からリークされた衝撃的な「イノベーションレポート」から5年。欧州各社もデジタル戦略で試行錯誤しているらしい。そんな現状を見てみたいと期待して

ツアーに参加した。もちろん下流設備に長年携わった身としては、昨年秋に稼働した最先端工場も気になるところだ。

「新聞事業の売上は紙が80%、デジタルが20%。一方で広告の伸びは紙が-30%、デジタルは+13%」。最初に訪れたポーランド・ワルシャワのAGORAグループでの話だ。

訪れた3社とも大幅な部数減に見舞われ、デジタルファースト、課金制、多角経営化と取り組みは似ている。デジタル戦略として、コンサルと契約するデジタル広告展開、デジタルマーケティングに20名を配置、初めの1時間は無料など様々に手を打つが、いまだに紙媒体の売上が8割もあり、その落ち込みをカバーできていないのが実情のようだ。それでも「会員数の伸びは昨年比30%」などとデジタルに期待を込める。映画事業や案内広告に代わる車・求人・不動産などのマーケットプレイス(ネット上の売買)、広告代理店、配送業、チケット販売など多角化で経営を支えようと必死だ。

ベルリンのWorld Publishing Expo会場でのセミナーで「紙の収益はいまだに高いが、それでもデジタル戦略が重要だ」と強調されると、聴衆から「じゃあ我々はいったい何をすれば良いのか?」という質問が出たように、デジタル戦略は正解が見えない。が、急激な部数の落ち込みに対して何もしないわけにはいかないという危機感が、欧州の新聞社を突き動かしていると感じた。

＊

AGORA社では「紙は出し続けることが重要」、Styria社では「新聞は高級品になっていく」と述べていたが、紙に対しての戦略を十分に聞けなかったのは心残りだった。

しかしその答えの一端が印刷工場で見えた。色調、見当など輪転機は高度に自動化され、これまではトラブルが多く人手がかかっていた刷版着脱も自動化され、小ロット、多媒体も効率良く印刷できる。私どもが建設



「新聞は高級品になる」と言うStyriaの社長兼編集長

した新工場とコンセプトが同じで、「我が意を得たり」と心強く思った。

＊

どの社もこのツアーのためにプレゼン資料を用意し、暖かく迎えてくれた。恐らくこのツアーでなければこれだけの情報に接する機会はなかったであろう。参加者の皆様、事務局、JTBの方々にあらためて感謝したいと思います。

＊



ゲーテンベルク博物館の42行聖書

(番外編)

台風19号による欠航で帰国が5日遅れることになった。おかげで予定にはなかったが、三大発明のひとつ「活版印刷」のゲーテンベルク博物館を訪問できた。ワインの葡萄搾り機からヒントを得て作られた印刷機、世界に48冊、日本には1冊しかない「42行聖書」などをこの目で見ることができた。580年前の活版印刷から始まった印刷技術が紙の新聞を大きく延ばすこととなり、そして今、デジタルの荒波に揉まれている。いろいろと考えさせられるツアーとなった。



ワルシャワからウィーン、グラーツへ



ワルシャワのAGORA本社

ワルシャワの旧市街(原木 伸也氏)



(東 哲也氏)

ワジェンキ公園のショパン像
=ワルシャワ

Styriaメディアグループ本社
=グラーツ



(木村 俊介氏)



王宮庭園のモーツァルト像
=ウィーン
(若生 直人氏)

夜のシュテファン聖堂
=ウィーン

紙とデジタルの両立に共感

東日印刷(株) 常務取締役総務局長

西川 光昭

当社は、昨年初めて社長がCONPT-TOURに参加した。経営者自らが見聞を広め、会社の変革に生かそうという狙いだった。社長の帰国後、さっそく制作室や印刷工場が欧州風に明るく模様替えされた。視察を参考に紙媒体を再評価する施策も打ち出された。そんな中、「今年は君が行ってこいよ」。社長の鶴の一声で私の派遣が決まった。

欧州は5回目の渡航。ゆったりとした大地と瀟洒な建物は変わらない。しかし、人々はグローバル化の波に揉まれ、ゆとりをなくしているような気もした。新聞・新聞印刷業界も日本同様、デジタル革命の大波をかぶり、部数減などの不景気な話題が多い。ただ、今回訪問した3社で感じたのは、経営者や担当者の再建に対する「熱量」だった。

デジタルファーストに転じる時の心境を「The Jump in the cold water (冷たい水に飛び込む)」とイラスト付きで表現したオーストリアのStyria Media Group。男性読者の多い日刊紙の週末版に女性誌をインサートする事業で成果を上げたポーランドAGORA社。ドイツのMVD社は、ウェブの有料課金サービスで、出稿から1時間は無料というユニークな試みを誇らしげに語った。デジタルへの挑戦や事業の多角化にはこの「熱量」は欠かせない。

一方、新聞印刷会社の経営者として嬉しかったのは、どこも紙媒体を重要視していることだった。「紙はプレミアムなものとして続けていく」(Styria)、「ビジネスとしては紙が良い。国内の印刷所は減る。その印刷をこちらで受注したい」(MVD)、「コンテンツの質が基本。紙は需要がある限り、出し続ける」(AGORA)。表現は三者三様ながら、紙を疎かにする会社はなかった。デジタルと紙は両

立させてこそ経営が成り立つことを改めて実感した。

*

編集室や工場の見学で感じたのは、欧州の余裕と人道主義だ。AGORA社は緑豊かで吹き抜け構造の開放的な社屋。Styriaの編集室はニュースデスクを中心とした同心円の洒落た配置で、電話専用BOXが設置されていた。工場で私が何より羨ましかったのは、輪転機のオペレーションが別室で出来ること=写真。防音の透明板超しに検紙も可能で、騒音に悩まされることもない。日本とは、立地条件や求められる品質も異なり、そのまま実現することは難しいかもしれないが、若い世代を考えると、何らかの対策が必要だと感じた。



台風19号の影響で、4日帰国が遅れた。この間、JTBや事務局の方々には早期帰国に向けて懸命に交渉していただいた。また、共に帰国難民となった視察団のメンバーにも何かとお世話になった。ありがとうございました。

南京？

(株)トッパンメディアプリンテック関西
技術課課長

中野 聖士

私は入社して25年間様々な紙印刷の工場に籍を置いてきました。

なので、今回、ツアーに参加させてもらう

にあたり、紙への印刷についての将来をポイントにポーランド、オーストリア、ドイツの印刷会社、WPE展示会を見してきました。どこもデジタルへの様々なトライをし続けています。ただ、デジタルでの利益確保は厳しく、どの会社も打開策を見いだせていない。また、紙の利益を超える利益創出の構造は作れていないということが分かりました。また、日本の新聞ほど物流が行き届いている国もないといったことも実感させられました。

振り返ると紙への印刷は紙、版、インキ、印刷、物流、販売店、配達、それに対する資材や各装置等、日本の経済を支えている一つとも言えます。新聞の印刷会社で働いていますが、今後工場に大事になるのは、如何に無駄をなくして効率よく新聞を印刷できるか、ということだと再認識させられたツアーでした。

*

今回のツアー参加者の中で私だけ目的地が伊丹空港だったため、経路が皆さんと違い、運良く皆さんより2日ほど早く帰れました。(フランクフルト⇒南京⇒関空ルート 約18時間*南京は5時間滞在)その時の状況を記載しておきます。

中国大陸は私にとっては初めての体験です。まず、フランクフルト空港で手荷物預け入れ時に、南京で一旦中国に入国しないといけないことが判明。(乗り換えの航空会社は同じアライアンスなのですが中国大陸においてはトランジットで手荷物移動をやらないとのこと)

しょうがなく、南京で中国入国です。入国審査に約1時間かかりました。更にチェックインカウンターは出国2時間前にしか開かないため、2時間程待ちになりました。喫煙スペースが空港外だったため、3回程度喫煙しに外に行ったのですが、その都度空港再入場時にBombチェックを受けます。(棒みたいなものでカバンを数回なぞる)空港内部も軍

隊の人が巡回して物々しい雰囲気がありました。南京空港自体は綺麗な空港だったので非常に残念です。また、Wi-Fiはつながったのですが、LINEやメールが一切届かない環境でした。

やっとカウンターが開き、手続きをして出国なのですが、中国入国時に持っていたライターを出国時には取り上げられました。(昔は日本も持込禁止だったけど最近は1つだけは持ち込めるようになった)

とはいえやっと出国し、食事です=写真。



これに飲み物付けて日本円で1200円。高いですが、空港内はこんなものでしょう。6時間ぶりの食事のため、とにかく美味かった。*ちなみに飛行機で隣が中国の方だったのですが、「We Chat」(中国版LINE)を飛行機が飛び立ち上空に上がる迄やっていました。

*

最後になりますか、他のたくさんの会社の人とこんなに長い期間一緒にいたのは初めての経験でした。事務局やJTBの方々こんな貴重な体験ができたことに感謝しています。

印象に残る「印刷の決意」

(株)日経首都圏印刷 製作部部长

刑部 勇

CONPT-TOUR2019に参加させていただきました。海外へは28年程前の新婚旅行以来でパスポートも期限切れのため、再申請手続きから出発の準備が始まりました。いよいよ出

発の日。緊張と不安をかかえつつ、通勤ラッシュの電車に乗り込み、羽田空港に到着。視察先である、ポーランド、オーストリア、ドイツに向けて出国しました。

*

今回のツアーでは、3社の新聞社を視察しました。新聞発行部数の減少、広告収入の落ち込みで、フリーペーパーの廃刊や、デジタル会員を増やそうと力を注いでいるが、現状は紙の収益のほうがデジタルを上回る結果となっている。しかし、コスト面については紙のほうが高いので、コスト削減に努力をしていることが共通していると感じました。

また、ポーランドのAGORA社での最後の質問で、今後ずっと印刷し続けますか？と聞いたところ、ハードな質問と言いつつも「ポーランドで必要とされる限り印刷します」との答えが印象に残りました。

工場視察では、Styria Media Group（オーストリア）とMärkische Allgemeine Zeitung（ドイツ）の2工場を視察。Styria Media Groupはグラーツにあるメイン工場の輪転機を昨年の秋に更新した（4×2→6×2）との事前情報があったので期待していましたが、残念ながら輪転室には入れず、オペレーションルーム越しに見るだけでした。ただ、輪転機が6×2だと分かるものが目に入ってきました。それは、三角板が一行に3台設置されている光景でした。私自身初めて見る光景だったので、間近で見たいと思いました。

Märkische Allgemeine Zeitungでは16の地域版を印刷している工場で、時間短縮のため刷版自動交換装置が設置されていて、版の交換に要する時間は4分とのことで、掲示されていた印刷工程時間表を見ると、版間は全て4分で過密なスケジュールでした。最後にIFRAを視察して今回のツアーは終了する予定でしたが…。

*

台風の接近に伴い、日本の空港は閉鎖され

帰国難民に。最初は台風が通過したら直ぐに帰国できるだろうと甘い考えでしたが、結果は4日間の延泊。ベルリンからフランクフルトへの移動も空路から陸路へ変更となったが、新幹線に乗れたことは貴重な体験でした。フランクフルト滞在中は、活版印刷技術を発明したゲーテンベルク博物館の見学（視察？）や、町の散策などをして過ごしました。15日に出国しドーハ、ホーチミン経由で17日の朝に無事到着。二度と経験できない15日間のツアーが終了しました。

最後に、無事に視察旅行を終えることができたことに感謝いたします。事務局、団長、副団長、参加者の皆様、JTB添乗員の方々、大変お世話になりました。ありがとうございました。

身も心も大きくなった

西研グラフィックス(株)
国内営業本部東京支社

米田 直史

今回のCONPT-TOUR参加の打診を会社から受けたのは7月。九州の佐賀から東京に転勤してきて間もない時期でした。

会社命令でヨーロッパに行くことができ、「よっしゃ」と思う反面、海外経験どころか駅前留学の経験すらない私としては「言葉も通じないのに無事に帰って来られるのか??」と大きな不安を抱えていました。日々の業務の慌ただしさの中、大した準備もできないまま、気づけば出発日を迎えてしまいました。

羽田空港では今回参加の皆様と合流した後、挨拶もそこそこに、出国手続きも終わらせ、ミュンヘン経由の十数時間のフライトを経てワルシャワへ到着。今回のツアーの本格的なスタートとなりました。

*

今回のツアーでは、3か国で新聞社3社、印刷工場2カ所を視察しました。いずれの新聞

社でも紙の部数は年々減少する一方で、オンラインでの購読者・アクセス数は毎年約30%程度増加しており、オンライン定期購読者を獲得していくことが最大の課題になっているように感じました。

ただし、部数が落ちていると言ってもどの社も決して紙を軽視するわけではなく、紙の新聞を高級なものとして電子版と差別化を図ったり、折込を充実させたりと、紙に付加価値を持たせて維持していく工夫をしていました。

日本においても年々紙の部数が減少し、スマホやPCが浸透しているのは同様であり、ヨーロッパとほぼ同じような状況あります。そのような中で生産設備メーカーとして、新聞業界にどのようなソリューションを提案できるのか、非常に考えさせられる視察となりました。

*

上記のような新聞社への視察が印象深かったのはもちろんですが、今回のツアーで特に記憶に残ったのは、やはり関東を直撃した台風19号の影響でフランクフルトに4泊、帰国まで合わせると5日間もツアー期間が延長になったことです。

元々の予定も全てこなし、後は帰国するだけと思っていたところで思いがけず帰国難民となり、できることといえば観光と食事くらい。延長戦の間、昼間は色々な名所を回ってひたすら名物を食べ、夜はホテルのテラスで同じく帰国難民となっていた他業界の視察団とも合流して飲み会をやったのは、日本が大変な状況だったことを考えると後ろめたくもありませんが良い体験でした。

長年添乗員をされているJTBの加藤さんをして「初めての経験」という状況の中ではありましたが、この延長時間があつたおかげで、参加された皆様とより深く関わることができ、普通では体験できない充実したツアーになったように感じます。



ドイツ料理の盛合わせ

*

出発の時の「無事に帰国できるのか」という不安はどこへやら。気づけば身も心も大きくなって帰国できたのは、ひとえにツアーに参加された皆様のおかげです。最後にはなりましたが、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

貴重な経験

第一工業(株)大阪支店
搬送システム部部長

若生 直人

冒頭ですが「帰国が遅れても一日、二日だろう」なんて思ったのは、ほとんどのメンバーだと思います。本当なら視察内容から書き出すのが普通でしょうが、今回のメインは悲しいことに台風影響で帰国便が欠航、10日間の旅程が「今日もダメ、今日もダメ」が続き15日間になるという【貴重な経験】ができたことが、印象としてどうしても残ってしまうのは仕方ないことでしょう。まさか1週間もドイツに滞在するとは…このままではこの話だけで終わるので軌道修正をします。

*

さて、ワクワクしながら羽田からドイツ経由のポーランドのワルシャワまで、今までの海外では経験のないフライト時間をどう楽しむかで悩みました。結果はお酒→映画→ウトウト→食事→トイレの繰り返しを3回繰り返してたら着いてしまいました。エコノミー症候群を仲間に脅かされていましたが、意外と疲

これはあってもタフな自分を再発見することができました。最初のポーランドのワルシャワでの印象は、やはり「シヨパン」で、心臓が保存されている教会には驚きました。シヨパン博物館側の塀は音符♪のデザインで大変お洒落でした。ピアノを弾く娘がシヨパン好きなのでお土産の中心はポーランドになりました。女性が小顔で背が高く美形の人が多い印象も残りました。

次にオーストリアのウィーンに移動し最初に思ったのは街並みがとても芸術的でまさに「インスタ映え」の言葉がピッタリ。とは言いながら、自分はインスタをやっていませんが…。流石に芸術と音楽の都ウィーンであり美術史美術館に展示のブリューゲル作バベルの塔の絵が印象的でした。オペラ座隣接の音楽関連店ではモーツァルトやベートーベンの関連グッズが沢山あってここでもお土産を買ってしまいました。最後にドイツのベルリンへ移動して直ぐ思ったのは人の眼付が鋭くて睨まれている感覚と煙草をスパスパ吸ってポイする人が多く、なんとなく治安が悪いイメージを持ってしまいました。しかしマスコットのベアーは愛らしく憎めない存在です。



ドイツで欠航が決まり帰国が延びて困った時、ドイツを知っているメンバーの方々に、行く予定には当然なかった活版印刷技術の発明者グーテンベルクの博物館へ連れて行ってもらい、初期の印刷機械や印刷物を見学しました。自分は搬送機メーカーでメカモノがやは

り好きなので、500年以上前に作られたものとは思えない程とてもよく出来た機械が印象的でした=写真。

＊

最後にこのTOURでは、新聞各社のデジタル化を含めた新しい未来を構築する戦略と工場設備を一新して印刷力を強化する動きの両方をつぶさに見聞することができました。自分も将来を考え、何かを生み出す力量を持たなければならないと感じました。メンバーとは本当に飽きずによく飲みましたよね！なぜかベトナムの「フォー」を食べラストタイガービール・ワイン等々【貴重な経験】でした。本当に皆様大変お世話になりました。

最後は直行

田中電気㈱ 開発営業事業部課長

桐生 賢一

ある日、CONPT-TOURの参加打診があり、最初は業務多忙な時期の為に躊躇(ちゅうちゅ)していたが、ワルシャワ、ウィーン、ベルリンに行ける機会などそうそうないため「行かせてください」と返事をし、参加することとなった。

訪問した新聞社では、どの新聞社でも日本と同じように部数が落ち込んでおり、デジタルでの収益を高めようとしていた。中には、デジタルのマーケティングを行い、明確なターゲットユーザーを定め、そのユーザーに対しアプローチし利用拡大を図っている社があり、やはり単純にデジタル化したところで収益には結びつかないのだと感心した。しかし、今後の紙媒体に関する質問の回答に、紙媒体に対する使命感も感じる事ができた。

編集部は、日本のように雑然としておらず、整然としていたことも印象に残る。各部署の配置が横並びではなく円形に近い形をしており、横並びと違いこの配置のほうが、リーダーが大きな声で指示をする必要がなく静かな



SYyriaのkleine Zeitung編集室

のだそうだ。(笑)

また、視察、移動、観光と続く中で、私は英語が解らず、通訳して頂くまで何を言っているのか解らないため、精神的には視察が疲れ、観光は体力的にハードであった。皆さんも疲れているのだろうと思いつつ、夜には呑んで語り続けるメンバーの方々の体力には、自分はまだまだだだと痛感させられた。

*

ある程度、日程が進んでいく頃には日本では台風19号のニュースが流れており、もうすぐ帰国という段階で、帰りの飛行機の欠航が決まった瞬間には帰国後の業務のこともあり頭を抱えたが、「しかたない」と吹っ切れた後は延長戦を楽しむこともできた。

ツアー最後には、30時間ほどの帰国移動後、羽田から出社し、そのまま客先に向かったことも後々には良い思い出となることだろう。

最後に、一緒に参加された視察メンバー、CONPT事務局、ツアー中の面倒及び帰国に尽力されたJTJBに、有意義で充実した時間を過ごすことができたことを感謝いたします。

初めての経験

(株)東京機械製作所
常務執行役員営業副統括

神崎 幸雄

初めてのCONPT-TOUR、初めての欧州視察。初めてみるヨーロッパの街並み、大聖堂、美術館どれも大変すばらしいものでした。ベルリンの壁、建物の銃痕など過去の負の遺産

も見ることになりましたが、それを教訓に今のEUがあるのだと思います。ドイツに入国し、ポーランド、オーストリアを経てドイツから出国。出入国の審査はポーランド、オーストリアにはなく、国を超えたという感じは全くありませんでした。私などは、単純に隣国との往来が自由でいいなと感じています。

今回訪問しました新聞社も、発行部数の減少傾向は同じで、新聞社として収益をどのように上げるか知恵を絞っていました。紙がなくなりデジタル化が進むと言われても、記事をスマホで読めるようにするだけで収益が改善するわけでもなく、デジタル化といっても簡単ではありません。どの新聞社でも今現在の収益の大半は紙の新聞と言っていました。デジタル化することでどの記事が読まれているのか分析が容易になり、そうした分析を専門に行う企業も存在します。私などは少し違和感を感じてしまいますが…。

*

最初の訪問地ワルシャワ到着してすぐに現地のガイドさんから「美人3人組のスリに注意」という話を聞き、翌日街中に出ると実際に会う人が皆美人でビックリしました。ベルリンのガイドさんもワルシャワは美人が多いと言っていました。

ドイツの高速道路は速度制限無とは聞いていましたが、速度計が130を超え160、180、200となると結構ドキドキで、スリルがありました。ドイツの新幹線にも乗ることになり、日本に比べると窮屈な感じがしました。デッキには、散歩しているかのように中型犬がゲージにも入らずに乗っているのに驚きました。ウィーンでは、マスク禁止！見つかったら罰金を取られることもあるようです。(覆面禁止法、2017年10月施行)

ヨーロッパは喫煙に厳しい地域と言うイメージがありました。実際にたばこのパッケージは相当過激な写真や絵が描かれていますが、街中にはあちこちに吸い殻が落ちており

喫煙には寛大(ルーズ)なようでした。私のイメージは全くあてになりません。

ネット上には様々な情報が飛び交っていますが、実際に現地でなくては知ることのできない情報が沢山あると改めて知ることになりました。

今回、帰国予定便がキャンセルになるという大変珍しい体験もしましたが、全員大きな体調不良もなく無事に帰国できました。参加された皆さん、今後様々な機会で開催できることを楽しみにしています。本当にありがとうございました。これからもよろしくお願ひ致します。

百聞は一見に如かず、新聞は一読で死なず!

ニッカ(株) 営業本部 新聞機器営業部部長
菅原 清弘

私の好きなCONPT会報記事にTOURに参加した方々の足跡投稿があります。各々の立場が分かる文章、工場見学や研修内容をひたすら真面目に書く人、訪問国の歴史や文化がメインで楽しかったと思わせる人、自分の身に起きた、起こした珍事件を書く人、どれも味があり、毎回行った気にさせてくれるのが有り難い。さて、今回は私の順番です。何を書こうか…。初めに言っておきたいことがあります。今回のメンバーは史上まれにみる優秀な人達(と聞く)で誰一人、他人に迷惑を掛けることもなく、均等に被害を受けた被害者(帰国難民)集団。でありながら、全員無事に帰国出来たレジェンド級だということです。そのメンバーに入ることができて大変嬉しくも思うし、営業としてもネタ満載でラッキーの一言であります。改めて、メンバーの皆様には感謝申し上げます。

*

今回の現地新聞社視察は3本社、2工場。個人的には、工場での目新しい設備は見られず、MANROLANDやKBAの輪転機も、過去に

中国市場拡販のために訪問した工場で見たことのある機種でしたので、収穫がなかったのは残念でした。その他、詳しい現地視察内容につきましてはツアー報告会の通りなので割愛させていただきます。

次にWorld Publishing Expoですが、自身では過去に出展者枠ではありますが、Nexpo、CHINA PRINT、drupaと行ったことがあり、時代の背景もあるものの、比較するまでもなく全体規模は小さく上流ベンダーが目立ち、下流ベンダーが少なくなっていました。同じ下流の当社としても、物が無い展示会で少々残念な気持ちになるものでした。但しセミナーでは、今後の紙文化をどのようにして継続させて行くのか等、現地訪問した新聞社で聞いた同じ問題についてセッションされていて、まだまだ紙に拘る傾向が見られ、多少なり安堵した感もありました。



フランクフルトでの昼食会

見られ、多少なり安堵した感もありました。

このツアーを通して考え得た1つを挙げるのであれば、国内外問わず、紙文化継続について声を上げている新聞社がある限り、当社の新聞事業も継続させていかなければならない、ということです。今後も、どんなカタチにせよできる限りの支援を怠らず、新聞社の皆様にご安心して採用していただけるように心掛けたいと思います。

台風ハギビスのお陰で自主研修できた思い出写真や、メルキッシュ・アルゲマイネに掲載されたツアーメンバーの訪問記事をスクラップ(切り抜き)して残そう!…そう思っ一読。おっと、これをスクラップにしては勿体無い。これが新聞の良さだとも私は思います。



ベルリンからフランクフルトへ



IFRA・DCX展の会場前で全員集合=メッセベルリン



ベルリン大聖堂(桐生 賢一氏)



レーマ広場を歩く=フランクフルト

(小松 一宏氏)



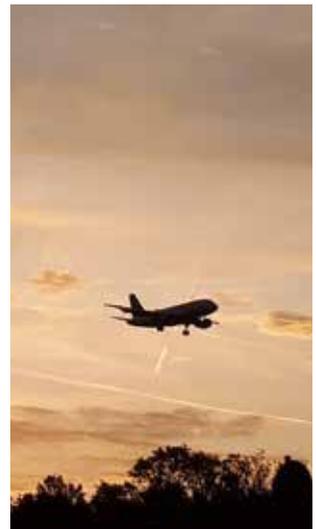
歓迎の日の丸

=ポツダムのMärkische Allgemeine紙



グーテンベルク博物館の一隅で

(水置 恒夫氏)



乗りたい…乗れない!!フランクフルト空港付近で

(吉野 豪氏)

結束が強まった特別の旅

日本アグファ・ゲバルト(株)
執行役員グラフィックシステム事業部
新聞営業本部長

佐藤 克英

今回は、44回目のCONPT-TOURということで、総勢29名によるツアーでした。私はツアーの副団長を拝命しましたので、「全員が無事に帰国できること」と「居心地の良いツアーで有ること」に貢献できればと考え参加させていただきました。ツアーの終盤では、台風19号の関東直撃に伴い我々の帰国便が欠航となりましたが、予定から5日遅れで全員無事に帰着することが出来ました。この間、予想もしていなかった行動を求められ、フランクフルトの滞在を含め約半月間をメンバーと共に過ごす事で、結束が強まっていった特別なツアーでとなりました。

*



ワルシャワの蜂起博物館にある印刷機械

最初の訪問先であるポーランドは、地理的にロシアや東欧圏の雰囲気を感じていましたが、首都ワルシャワは洗練された街の雰囲気を感じました。第二次世界大戦の中でも新聞を発行し続け、市民に情報を届ける役目を果たしたとし、蜂起博物館では銃火器と共に印刷現場が再現されており、とても印象的でした。東日本大震災などの災害時に新聞が情報源となり文字が人々の心に語りかける強さを思わせる展示でした。

最初の視察AGORAは、紙とデジタルの共

存に対し、近隣諸国を含む配布エリアのマーケティングから、デジタル配信のみの国もあり、選択と集中のビジネスを展開しておりました。

第2の訪問地ウイーン(オーストリア)ではStyria Media Groupを訪ね、印刷工場の視察が実現できました。ツアー参加者には、製版、印刷機、インサーターなど、ビジュアル面で理解しやすかったことと思います。印刷工場は、主要取引先となる新聞社の経営動向と周辺の印刷会社の設備環境を見ながら自社の将来像を描き投資を進めていました。

3番目の訪問先、ドイツのポツダムでは「Märkische Allgemeine Zeitung」を視察、翌日の同紙面には、我々の視察ニュースが写真入りで掲載されており、なぜか大衆に配られる紙面に自分達のことを掲載される嬉しさを感じました。

*

最後にWPE IFRA展の視察となりましたが、昨年よりも展示規模は縮小されており、情報が溢れている時世において、集客の難しさは我がことのように感じる場面でした。



ゲーテンベルク博物館前にて

さて、番外編ですが、フランクフルト滞在中は研修の一環と理由を付けて、希望者を募りマイنتツのゲーテンベルク博物館をご案内させていただきました。アウトバーンをベンツのタクシーで時速160km、ここでは、聖書の普及に大きな影響を与えた印刷の起源に触れ、なぜか印刷を理解したつもりになってしまいました。

ご同行いただきました皆様にとって「居心地の良いツアーで有ったか」は計り知れませんが、皆無事に帰国できたことに感謝を申し上げます。

紙への回帰、期待できる

日本新聞インキ(株)
大阪支店営業部副部長

小松 一宏

社の命を受け、今回CONPT-TOUR2019に参加させていただきました。10月3日より8泊10日の旅程でポーランド、オーストリア、ドイツの3カ国の新聞社を視察、メインはドイツベルリンにて開催のIFRA・DCX展示会場視察と充実した8日間となるはずでした。

十数年ぶりの海外、パスポートも切れ準備に追われる毎日、気持ちだけが高ぶり出国日だけが刻々と迫ってきて、結果的には準備不足のままツアーが始まりました。

*

欧州各国の新聞事情は、一昨年、昨年のツアー参加報告にもありましたように「紙が減る、無くなる」「紙が見直される」等、今回の視察先も3カ国とも事情は同様であると感じました。

日本の新聞事情と大きく異なるのは、発送、店着、宅配の時間に制約を受け、かつ速報性(ニュース)を掲載することで価値を高めて来た一方、今回の視察先での事情は、ニュースは勿論ですが地域に密着した情報を掲載するため、少部数(3000部程度)での版の切り替えが多く、また大きなドラム型のインサーターに印刷物がセットされ印刷を行いながらインサートするため、印刷スピードは上がっていない(上げられない)のが印象でありました。とても時間に追われた新聞発行が行われているとは思いませんでした。紙面品質に於いては、スピードからも優位性は欧州ですが、日本も負けず劣らず高いレベルだと感じまし

た。

新聞の定期購読が収益の大部分を占める一方、ラジオ、テレビのメディアをはじめ、フリーペーパー、雑誌、チケット販売、映画、などの両輪で経営を行なっていました。広告収益が落ちるばかりで、新聞紙とデジタルをどのように紐付けしてデジタルのコンテンツを課金する方法をどこの社も一様に模索しているのが実情のようでした。日本のサブスクリプションモデルも、定期購読とデジタル活用を促しているものの、デジタルの普及が鍵となっているようです。新聞が地域性や独自性に特化する方向、紙とデジタルをセットで強化し会員の増強を狙う方向へモデルが確立されれば、紙への回帰も期待出来ることが今回の視察を通じて伺えました。明るい兆しが見えて欲しいものです。

まだまだ学ぶべきことはたくさんあったのでしようが…。

*

博物館、美術館、宮殿、大聖堂、石造りの街並み、見るもの全てが新鮮で、ヨーロッパを肌で感じ二度と経験出来ないであろうことを考えると、帰国の日が近づくに連れて非常に寂しさを感じました。



ウィーンの街並み

滞在中は日本のニュースも欠かさずタイムリーに入って来ますので、ラグビーワールドカップ日本代表の躍進も、大型台風19号ハギビスの進路予想もリアルタイムに確認が出

来、便利さは非常に有り難いものではありません。

その台風が日本を直撃することにより帰国便がキャンセルとなってしまう、必然的に乗継便までがキャンセルに。事態が理解できないまま列車で滞在中のベルリンからフランクフルトへ移動、そこからJTBの加藤さん、馬場さんの航空会社との交渉が始まりました。翌日の同便で帰国出来るものと安易に考えておりました私は、帰国便が決まるまで滞在期間が延びることを改めて理解したのは、火災報知器の非常ベルが鳴り響いてホテルの外へと非難を余儀なくされたフランクフルト初日のホリデイ・イン。腹を括ってドイツ滞在を堪能しようと決め込んでいました。もちろん、日本への帰国遅延報告は羨む声ばかりがメールで届いてきました。

ゲーテンベルグ博物館で活版印刷の起源を視察、マインツ大聖堂を見学と、すでに視察研修は終了しておりましたが、らしきことを実施しながらツアーの皆様と過ごさせていただきました。

帰国際の乗り継ぎでは新たな2カ国。色々



マインツ大聖堂

と貴重な体験をさせていただきました。延長された結果15日の旅程になってしまいました。が、無事帰国し終えられたことは大変お世話になったツアー参加の皆様のおかげと感謝致します。楽しく過ごさせていただきましたこと、この場をお借りし御礼申し上げます。

なんだか男気ある人間に…

富士通株

社会システム営業本部メディア営業統括部
第一営業部アシスタントマネージャー

田中 裕哉

今回CONPT-TOURの話を受けた時の私はヨーロッパの新聞社視察ができることの喜びと印刷工程を中心に視察するという、自分の知識の範囲ではないことへの不安が両方ございました。

ただ当初の不安は日数が経つごとになくなり、欧州のデジタル化事情や、マインドを直に感じる事ができたことは非常に良い経験でした。

*

まず一社目のAGORA社の内装を見た時、開放感がある空間(シェアオフィスのようなオシャレな空間)に日本企業とは少し異なった先進性を感じました。

彼らの話を聞いていて驚いたのは、2014年よりデジタルの有料化を開始して、19万人まで会員数を伸ばしている進捗状況以上に、デジタルマーケティング部隊が20人のメンバーにて構成されているということでした。

20人がどのような役割を担い分析しているのかまでは分かりませんでしたが、ユーザーをスーパーユーザー1、2と分けてユーザーをデータの理解できることに価値を見出している点において、ビジネスを行う上でも学ぶべ



長引いたツアーのあい間にながめた風景

きが多かったように感じています。

＊

2社目のStyria Media Groupでは、デジタルに向けての取り組みと合わせて説明された資料の一部に、新聞紙を「高級ブランドと同じように扱っていかねばならない」がありました。その時の表現の中で私が感じていたことは、デジタルと紙がカニバルではなく、今の紙の新聞には今後+ a な新たな価値提供の形が出てくるのではないかという期待を持ちました。

そして、改めてWORLD PRESS TRENDの中で世界のTOP10のnewspaperランキングで日本企業が4社も含まれており、世界の新聞社にとって憧れとされている日本の新聞業界を担当させていただけていることに、個人的な喜びと、これからの業界の変化に対してどのような貢献をできるのかと考えるきっかけになりました。

＊

最後に、今回の旅で様々な料理や様々な景色を見ることができ、非常に貴重な経験を積むことができたと共に、新聞業界を担当されている方々と懇親の場を通してお話しできたことは、まだまだ担当として浅い私にとって新鮮な話が多く楽しむことができました。

ロッキー田中というあだ名も、バシヤ19の皆さまにつけて頂き、なんだか男気ある人間になれそうなので、今回のCONPT-TOURの

中の思い出の一つとして忘れないようにしたいと思います。

お世話になりました皆様には心より感謝申し上げます。今後ともよろしく願いいたします。

ツアー延長戦

富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(株) 新聞営業部 販売一課課長

清水 教弘

2008年以来のCONPT-TOURに参加した。前はdrupaを視察し、アイルランド、スペインの新聞社ならびに新聞印刷工場を見学した。今回はCONPT-TOUR初となるポーランドとオーストリア、ドイツのルート。10月3日に出発、10日間の日程で10月12日に帰国する予定だった。関東地方に台風19号が近づいていることは、ツアー最終地のベルリンで参加メンバー皆が気に留めていた。まさかこんなことになるとは。

航空会社が用意したフランクフルト空港からシャトルバスで15分位のホテルに4日間滞在した。個人的には「ツアー延長戦」と名付けていた。ある1日、有志メンバーでゲーテンベルグ博物館に行った。ホテルからシャトルバスで空港に行き、タクシー3台に分乗し向かった。時間にして20分位だったろうか、速度無制限の高速道路“アウトバーン”を180km/hでフォルクスワーゲン車は走行、はじめての体験だった。

＊

博物館内2階にはゲーテンベルグが印刷した聖書が、いくつかのガラスケースに納められており、印刷機械も複数台展示されていた。上のフロアでは印刷に使われた中国の活字等、東洋の取集品もあった。地下1階では1時間に1度行われる印刷デモを見学した。活字に使われている鉛や合金を実際に溶かし、型に流していた。そしてインクを塗った後、紙



ライン川にて

に印刷するところで観客の1人が選ばれ、古い印刷機で作業を手伝う演出だった。見学後は館内のミュージアムショップで各々気に入った商品を土産として購入した。マインツ

大聖堂を後にし、ライン川まで散策、風光明媚な場所でひと時を過ごした。

“ツアー延長戦”ではフランクフルト市内1日観光など、せっかくのチャンスをメンバーと有効に過ごした。羽田にはドーハ、ホーチミン経由で2日間かけ、何とか10月17日に帰国した。

一緒に過ごさせていただいた皆様には大変お世話になりました。“帰国難民”となったものの結果全員無事でツアーを終え、一生忘れることのできない視察旅行となりました。ありがとうございました。

それぞれのカラー、興味深く

方正(株) メディア事業部

木村 俊介

今回、CONPT-TOURメンバーの最若手として参加をさせていただきました。

周りの方は自分より業界経験の長い方ばかりで、非常に学びが多く、ベテランの皆さまから様々なことを吸収出来たTOURだったと感じています。

オーストリア・ドイツには5年前にプライベートで旅行に行ったことがありますが、海外の新聞社、印刷工場の視察という目的を持っての海外は、以前の旅行とはまた違った角度で外の世界を見ることが出来ました。

*

個人的にはデジタルへの取り組みとして、クレジットカード決済に力を入れている企業、無料配信を有料化した企業、時間制の課金制度を設けた企業など、戦略に各社それぞれのカラーが出ていたところが非常に面白く感じました。

加えて、印刷工場を見学出来た点は日頃、上流工程部分を担当している身として、直接、目で見る回数は少ない方でしたので、とても



ワルシャワ蜂起博物館にて

新鮮で貴重な体験となりました。

また、台風19号の影響で帰国出来なかったことも、TOUR参加者の皆さまと密に関係を深めるひとつのきっかけになり、忘れられない思い出となりました。

今後も本TOURでできた参加者皆さまとの繋がりを深め、見識を広めることで、業界の皆さまのお役に立てていけたらと感じています。



Märkische Allgemeineの印刷体制を聞く

Styriaで印刷工場を見る



AGORAの概要レクチャー



現地研修会で情報共有

M・ワーフェル氏引退

WAN-IFRAのDeputy CEOを務め、永年CONPT-TOURに協力していただいたManfred Werfel氏が今回のIFRA・DCX展をもって引退されました。

CONPT-TOURでは、新聞社や印刷工場の紹介や仲介役など数々のお願いを快く引き受けていただきました。IFRA展ではセミナーを願ひして、昼食までご馳走になっていました。厚く御礼申し上げます。次第です。

今回のセミナーは「Changing Print」と題するWAN-IFRAのレ

ポートに基づくもので、「新聞技術のターニングポイントは1970年であった」として、外部からの革新が重要な役割を果たすことなどを強調していました。また、今後の新しい相談役として、Ingi Rafn Olafsson氏(Director of World Printers Forum)を紹介していただきました。

ツアー帰国後、ワーフェル氏から、「CONPTとWAN-IFRAの関係がさらに深まることを祈念します。現在の新聞界にとって、国際的な交流は極めて重要です」とのメールが届きました。(事務局)



全体夕食会で挨拶するワーフェル氏

第125回技術懇談会

神戸新聞「播磨製作センター」を見学



日本新聞製作技術懇話会は第125回技術懇談会として10月24日、神戸新聞社の新しい印刷工場「播磨製作センター」の見学会を実施した。会員社などから20名が参加した。

播磨製作センター（兵庫県姫路市四郷町）は神戸新聞社にとって西神（神戸市）、阪神（西宮）に続く3カ所目の印刷工場で、5月7日に全面稼働した。三菱重工機械システムの4×1輪転機を2セット導入。48 ϕ と40 ϕ に対応でき、どちらも24 ϕ のカラー印刷が可能だ。約6500 m^2 の土地に鉄骨鉄筋コンクリートの免震構造地上3階建て、延べ床面積は約4800 m^2 、非常

用電源設備を備える。運営は神戸新聞総合印刷が担う。

一行はJR姫路駅に午前11時20分に集合、バスでセンターへ向かった。春山正範センター長らの出迎えを受け、早速、見学特別号のための記念撮影。

見学は免震構造設備からスタート。1995年の阪神淡路大震災で被災した経験から、震度7にも耐えられるよう41個の積層ゴムを設置。ゴムは60年以上の耐久性があるという。床下の空間には当時のさまざまな紙面が投影される。大災害時にも必ず新聞を届ける——その決意、その重要性が社屋の礎に重なる。

発送ゲートを通して輪転場の隣の立体紙庫へ。最大159本の巻き取りが収容可能で室温23度、湿度50%を目標に管理されている。

続いて無処理版を使用する製版室を見学して、輪転室へ戻ったところで、ちょうどBセットの印刷が始まった。こちらは受託紙夕刊の印刷だ。素早い検紙、刷り出し損紙は少ない。

一方のAセットでは本紙の夕刊刷版がCTPから次々に出て、印刷開始へ向け準備作業が進んでいた。

工場紹介・質疑応答の席では、安定稼働を重視して成熟した設備を導入、工場建屋はコ

尊重し合える社会を支える

——新聞大会開く（宮崎）

第72回新聞大会（主催・日本新聞協会）が10月16日、宮崎市のシーガイアコンベンションセンターで開かれ、「令和の時代を迎えても新聞は、人々の考える糧となり、地域や世代を超えて互いに尊重し合える社会を支えていく」との決議を採択した。新聞協会賞は編集部門4件（追加授賞1件）、技術部門1件、経営・業務部門2件に贈られた。

大会には新聞社、通信社幹部ら約450人が参加。研究座談会は「未来の読者を育てる—若い人へのアプローチ」、「新聞社の新しいビジネスの展開」をテーマに討議。山口寿一新

聞協会会長をコーディネーターに、パネリストとして渡辺雅隆朝日新聞社社長、広瀬兼三北海道新聞社社長、小坂壮太郎信濃毎日新聞社社長、町川安久宮崎日日新聞社社長が登壇した。研究座談会に先立ち、歌人の俵万智、伊藤一彦両氏による「言葉の力 ～新聞と文芸欄」と題する記念講演があった。

新聞協会賞の技術部門は朝日新聞社の「ネットワークインフラの再編」（諏訪部智氏）が受賞した。社内ネットワークの再編にあたり、導入実績の少ない先端通信技術「SD-WAN」を採用し、利便性とコスト削減を実現。各社がネットワークインフラを再構築する際に参考になるものとして評価された。（事務局）

コンパクトな設計だが、生産エリアはコンパクトにはしていないこと、省エネ、コスト削減に効果があったことなどが紹介された。センター新設によって兵庫県西部での神戸新聞のプレゼンスを一層高めていきたいという。お話を伺った後、最後にインキタンク室を見せていただいで見学を終えた。

この日は生憎の雨であったが、一行は帰途、

世界文化遺産・国宝の姫路城に立ち寄り、天守閣から城下を一望した。



今回の見学に際し、神戸新聞社、神戸新聞総合印刷の皆様ご多忙中にもかかわらず、本来の見学コースではない場所にもご案内いただき、また貴重なお話しを伺うこともできました。厚く御礼申し上げます。(事務局)

CONPT 日誌

- 5月20日(月)第45回定時総会並びに懇親会
(於日本記者クラブ・大会議室、
来賓3名、会員社30社42名)
- 6月11日(火)クラブ委員会(出席7名)
13日(木)広報委員会(出席5名)
17日(月)第124回技術懇談会～中日新聞社・辻町南工場見学会～(27名参加)
- 19日(水)評議員会(出席5名)
20日(木)技術対話部会(出席8名)
企画委員会(出席11名)
- 7月16日(火)技術対話部会(出席6名)
23日(火)評議員会(出席7名)
- 8月13日(火)～16日(金)事務局夏季休暇
- 9月9日(月)技術対話部会(出席6名)
企画委員会(出席8名)
12日(木)クラブ委員会(出席8名)
17日(火)CONPT-TOUR旅行説明会(於新聞協会会議室、出席25名)
26日(木)評議員会(出席10名)
広報委員会(出席9名)
- 10月3日(木)CONPT-TOUR2019出発
17日(木)CONPT-TOUR2019帰国
24日(木)第125回技術懇談会～神戸新聞播磨製作センター見学会～(20名参加)
- 11月7日(木)技術対話(於中国新聞社)
12日(火)クラブ委員会(出席8名)

- 15日(金)広報委員会(出席8名)
CONPT-TOUR2019視察報告会
(於アラスカ、76名参加)
- 18日(月)技術対話部会(出席9名)
企画委員会(出席10名)
- 20日(水)技術対話(於信濃毎日新聞社)
- 21日(木)評議員会(出席8名)

会員消息

■担当者変更

- *東京インキ(株)
[新]六本木 猛氏(インキ営業本部インキ営業第一部担当部長)
[旧]相川 孝氏

■新会友

- *手打 省一氏(ストラパック(株))
*島 光一氏(株)金陽社)
*相川 孝氏(東京インキ(株))
*松邑 康弘氏(方正(株))

新着資料

- *日本新聞協会
“放送で気になる言葉 敬語編2019”
“新聞技術” No.248～249
“NIEニュース”第94号
- *東洋経済新報社
“AI VS 教科書が読めない子どもたち”
*FFGS “FGひろば” 175～177



ワルシャワ郊外、ワジェンキ宮殿の秋(東 哲也氏)

井上氏



東氏



吉野氏



CONPT-TOUR2019 帰国報告会

CONPT-TOUR2019の帰国報告会を11月15日、日本プレスセンターで開いた。

講師は訪問した新聞社の上工程とDCX展について東哲也氏(日本電気)、下工程とIFRA展を吉野豪氏(朝日新聞社)、世界の

新聞事情などをテーマにしたセミナーを含むIFRA・DCX展の総括的報告を井上秋男氏(メディアテクノス)をお願いした。

新聞社関係、会員社などの約70人が聴講した。(事務局)